

“これが削蹄の概念です”



左端は普通の写真。右3枚は、3Dスマホアプリ、スキャニバースで加工したもの。

写真は、先日櫻山獣医師の削蹄&蹄治療練習に立ち会っている時に、ふと角材を削って作ってみた趾端のモデルです。「副蹄の位置」だけは線を付けましたが、あとはフリーハンドでチェーンソーアートのようにやってみました。

蹄病の講習や実習の時に、よく質問されるのは、「削蹄って、どこをどれだけ削ればよいのですか？」です。このような質問に対して私の答は、「その質問は根本が間違っています。“どこをどれだけ残せばよいか”を考えながらやるようにしましょう。」です。昔の高僧は仏像を彫る際に、「木を見て、中からお釈迦様を彫り出すのだ」とおっしゃったそうです。そういうイメージです。そういうイメージがないとうまくいかないのです。バランスが乱れます。病変があるときも、その病変に対して安静にさせること（免重）ができるかどうかも重要なイメージです。削蹄の方法は世界中で種々開発されています。どれにも一理あるようです。削蹄師さんは、その農場に合った削蹄をされていると思いますが、一つだけお伝えしたいことがあります。それは、実際にその農場に合っているかどうかのチェックだけはしてほしいのです。具体的には削蹄の1週間後に様子を農場から削蹄師に報告する形が良いと思います。それはユーザーである農場主と削蹄師との契約に組み込むべきだと考えています。

★4月から「跛行の研究会」というのを始めました。月に1度まだ少人数ですが、ノースイの人も削蹄師さんも・・・今度は6月30日、農家の方も入っていただければと思っています。ご希望の方はご連絡ください。

070-7400-0448 (あべ)

★護蹄研究会 HP も情報源です！

